

小さい頃から漫画や本が大好きでした。勉強はあまり得意ではなく授業中も小説ばかり読んでましたね。仲のいい友人と、ちゃんと向きあってくれる先生に恵まれてはいたのですが、学校という場所そのものに息苦しさを感じていました。そんな日常から救ってくれたのがいろいろな本たちでした。本を開いた瞬間、全く違う世界が開け、たちまち没頭することができたんです。それで高校の頃から漠然とですが、本に関わる仕事がしたいと思っていました。高校を卒業したら地元を出て、東京の大学、なかでも早稲田大学に行きたかった。早稲田大学出身の家庭教師が、おもしろい人がたくさんいてすごく楽しかったと話していたからです。広い世界へ飛び出して、楽しい人たちや想像もできないことと出会いたいという思いが一番のモチベーションでした。

高校時代の成績はよくなかったですが、幸運にも早稲田大学に現役で合格。ミステリー研究会に入り、推理小説だけではなく純文学や海外作品などいろんなジャンルの作品を読みました。誰にも何も強制されない自由を享受して、地味に学生生活を満喫。就職を考える頃には明確に純文学の編集者になりたいと考えていました。飽きっぽくてあまり物事に熱中することがない私でも、子どもの頃から続いている唯一の好きなことが読書だったので、本作りに関わりたいたい。作家さんと話したいという欲求も大きな動機の一つでした(笑)。出版社の就職試験を何社か受けて、文藝春秋に入社。週刊誌とエンタメ系の文芸誌の編集部を経て、入社6年後に念願の純文学の文芸誌の編集者になりました。昨年、担当した又吉直樹さんの『火花』が芥川賞を受賞したときは興奮しました。私にとっていい本とは、読んで楽しいとかおもしろいというだけではなく、自分が今存在している時空とは違う世界や可能性を見せてくれるもの。私自身、10代の頃はそんな本を読むことによってすごく救われたので、作り手として1冊でも多く世に送り出したいと思っています。何より、自分自身がそういう本を読みたいんです。

学生の頃から自分の好きなことしかしたくない、というより、他のことができないので文芸の編集者になったわけですが、好きなことはその人の強みになると思います。もちろん仕事は楽しいことばかりではなく、つらいときもあります。それで仕事が嫌になったことや、この職業は自分には向いていないのかなど悩んだ時期もありました。そんな悩みを大学時代の友人に打ち明けたとき、「大学の頃、あなたは本が本当に好きなんだということがひしひしと伝わってきていたよ」と言われたんです。その言葉でやっぱり本が好きという気持ちが私の原点なんだと改めて気づかされて、これからもこの道で頑張っていこうと思えたんです。最後に自分を支えてくれたり救ってくれたりするのは好きという気持ちだと思うので、高校生のみなさんも好きなことを見つけて打ち込んでほしいですね。そのために取りあえずでもいいので、いろいろなことを体験してみるのがいいと思います。

好きなことは自分を助けてくれる強みになる。
それを見つけて打ち込んでほしいです

文芸編集者／浅井茉莉子



Mariko Asai

あさい・まりこ

1984年北海道生まれ。札幌西高校、早稲田大学第一文学部英文科卒。2006年、株式会社文藝春秋入社。『週刊文春』で記者として2年間、エンタメ系の文芸誌『別冊文藝春秋』で編集者として4年間勤務した後、2013年から純文学系の文芸誌『文學界』の編集者に。芸人である又吉直樹氏の小説家としての才能にいち早く注目し、原稿執筆を依頼。担当した『火花』が2015年第153回芥川賞を受賞。251万部(2016年3月現在)という純文学作品としては異例の大ヒットを記録。その立役者として注目を集めた。